

雑 想

菊・保 育

このところよいお天気が続いている。今、世の中にはやっている「かぜ」としめり気とが関係があるかどうかわからないけれども、俗にいう乾燥しきったためになお一そう「かぜ」がはやるのだとしたら、一雨ぐらいはほしいような気もする。が、勝手だけれど、今雨が降るとせっかく今を盛りと咲いている菊が色あせてくるのはどう考えても惜しい。大輪の白・黄の花が水をいっぱい含んで首うなだれてしまうのはあわれである。見る人はともかく、これを作った人の身になるとしても立ってもいられないらしい。うちの狭い庭で菊を作っている父は、日中の風・雨の変化に對してはもちろん、毎夜天気予報を聞いて雨の降りそうなききは、鉢物は軒下や家の中にしまいこむし、地植えのものには考えただあげくビニールの袋を花の上にかぶせてからねる。始めのころは「菊にレインコートをかぶせる」とうち中で笑っていたが、私はこのごろその気持がわかるような気がする。菊は一年中手がけなければ秋にその成果を見ることはできない。「秋になりて菊作ろうと思ひけり」である。

この早急に成果をあげることができない、ということと、こま



村 田 修 子

ごましい世話 ということは保育にも通ずるものをもっている。そしてこの作った人がかんじるその身になって、みるということも小さい人たちを預る私たちにとってどんなに大切なことか、そしてまたどんなにむずかしいことか、しみじみと思う。

不幸にして私たちおとなは、誰でもがとおってきた幼児のころのことは大体覚えていない。砂利道でころんで膝が痛いとき、なるといってもらったことが一番うれしく、勇気をふるいたたせられたか、いたずらをしたとき、お母さんになんといわれたことが「もうそういうことはやめよう」とか「悪いことだった」と一番思われたかなど…… こういうことを思い出すことができたとしたら、どんなに毎日子どもたちに満足を与えることができるであろうか。私たちは毎日純心そのもの子どもと接しているから、ほかの世界のおとなの人よりは幾分童心を失わないでいるつもりではあるけれども、「忘れてしまった幼児の世界」と、「毎日流れている保育の中のいそがしさ」のためにその身になってあげられないことがたびたびある。

このごろ毎日幼稚園にかかってくる欠席のことわりの電話はたいてい「かぜをひいてねつが四十度あるとか、咳がひどい……」

というのが多い。こういう話しを聞いた場合、「たいへんですね、おだいじに」とか一応はお見舞も同情したことばもいえる。ところが去年高い熱の続いた経験をもって以来、こういう話を聞く、その病気によって苦しんでいるお子さんの姿を、自分の苦しみを思い返しつつ本当にその身になって同情することができた。

前の気持とあとのそれは、外見にはもちろんわからないし、ことばで「どうちがう」とはいえないけれど、なにかぞくぞくと身に迫ってくる感じから考えてみると、前のは単にそういう事がらに対する一種の形のようなもので、正直のところことば・礼儀づ拉斯幾分の同情であった、と思われてくる。

この身になる、ということとともに、自分自身が経験する、ということも幼児を保育するにあたって、先生・子どものどちら側からいっても大切なことである。

うらやましいこと

こどもたちは中学・高校になると、おとなのように経験をへたものではないが、その年齢相応の確固とした人生観・社会観というものをもち、大体において親はけいえんされる立場におかれてくる。

この秋の芸術祭参加作品で文部省推せん映画「娘は娘母は母」の中でも、自分のことを少しもかまわず犠牲的に家族のものにくくしている疲れた母親を腹立たしい思いを含んだ目でみる娘。自

分の衣服のことより娘に新らしいものを、というみすぼらしいかつこうをした母と一しょに歩くことをいやがる娘・それに気がついて身なりを整えた母に、自分から寄りそって一しょに肩を並べて歩く娘の幸福そうな顔…… こういうのがあったが、こういう人たちもおとなの言うこと、とくに先生というおとなの言うことをただひたすらにきいてくれる時期があったわけである。

それだけにこの時期をあずかる幼稚園では、その効果をあげるために家庭と密接な連絡をとりながら同じ目標に向っていく必要がある。そこで幼稚園の先生はより以上に親と接しよくをもつようになる。年齢が小さければ小さいほどそれは多くなる。

幼稚園でいろいろの連絡をするのは母親が大部分であるが、その中にはいろいろの考えかたの人がいる。母親は大体自分の子どものこととなると夢中といっていらいらい一しょうけんめいであるが、私が経験した親の中に自分の子どものことはもちろんなにつけても熱心であるが、社会生活をしていく上の常識的なことで子どもがらわきまえていなくてはならないこと、例えば、乗物の中でひどく騒ぐとか、腰かけの上に靴のままのつてしまおうとかいうような場面をみたときなど、自分の子ばかりでなく、子どものお友だちにも全然知らない子どもにもその言動について注意したりとめたりする人があった。

ところがほかの母親と話しあいをしていると、その話しの中で、他の人の子どもにそういう扱いをすることに対して批判めいたものがいつとはなしに語られることがあった。その批判の大部

分は「おせっかいである。出すぎている。あの人はこわい。しっかりしている(あまりよい意味ではない)。自分の子が注意されてしゃくにさわる。」というようなよくないものばかりであった。もちろんそういうことも、他の人に悪い感じを与えないようにできたら一番よいので、やりかたもあることは思うけれども、それをきいて私は、そういう批判しかできない片方の人についても、その人というものを知ることができた。私はよく冗談にそういう人を典型的な日本人という。

この、自分の子を一心によくしようと考えることは日本人のよい点かも知れないけれど、なんとという狭いよさなのだろうとも思う。

この小さい国の中に、世界でも上位の人口密度をもつ日本では、他の人のことなど考えていられないため、しらずしらずのうち日本人の身についてきてしまったのかもしれないけれど、そのどっちを向いても人につきあたる中であつてこそ、ぶつかり合う人たちのことも考えなくては結局自分にそれがかえってくる。みんなが広い心をもってこそ進歩や発展があるといえる。

この狭さについて男の人と女の人の場合を考えてみると、残念ながら女の方が「典型的な日本人」が断然多い。世の中にいろいろ仕事がある中で、幼稚園も女の人の多い社会である。そこに住むわれわれは次の時代の子どもを育てるのに広い心であり、そして広い心をもった子どもを作りあげる人でありたい。

こんなことを考えていたので、最近読んだ本はひどく感銘をう

けた。我が意を得たり、とうれしくもあり、それが外国のことだつただけにうらやましくも思った。

それは日本の若いビアニスト(十代)がウィーンで勉強している日記である。そういう人たちの生活している家庭は特別の知り合いというのではなく、普通の家庭の世話をうけるらしいが、その母親がわりになる人たちはよその家の人、外国人とかいう区別をせず親身になってすべてに心をくぼり、温い気持でつづんでいることがよくわかるが、その中でもきちんとしてはならないことは誰にでもようしゃなく厳格とみえるまではつきりしていることは感心するばかりである。少し抜すいしてみると、

・おなががいっぱいになってしまったので残したらムッテイ(母親)に「全部たべなさい」といわれた。

・「○○はピアノばかりでなくアイロンをかけることもできなくてはいけない」

・用事でおそくなると必ず迎えにきてくれる。あるとき行きがちがいになってしまった。ムッテイは怒るようにして「いつも○○が出かけるたびにとっても心配しているのよ、ウィーンにいる間は私がお母さんなのだから監督しなければいけない」といった。

・日曜日にはみんなの休養日という意味でピアノはひかない。あるとき間に合わないので練習していたら、「きまりは守りなさい」と注意された。

・ムッテイが綺麗に掃除をしたあと「じゅうたんがきれいになったのだから、あまり何度も歩かないように。自分のへやから持っ

てきたいものはまず考えてまとめて持っていらっしやい」とたいへん合理的な注意をされた。……

こうして書きぬいてみたら、感銘をうけたときの味はあまり出てこなかったが、その本全体にあふれているのは人種を超越した温かい人間味であった。

他人の子に対しても、「自分の祖国の子どもである」と考えるという話には、外国の旅を経験した人によってしばしば語られることである。私ももしそういう経験をしたらもっともっと積極的に行動できるかも知れないけれど、今のところ前にあげた積極的なお母さんのようにしたり、そういう話をして、その真の意味を正しく理解してくれる人はごく少ない。大ていはその裏を考えられたり、変っている、ぐらゐの批判しかされないことを知っている、ただ外国の身についた習慣をうらやましく思っている。

道徳教育

「習慣」といえば、最近盛んに論議されている「道徳教育」について書かれている新聞記事をみてちょっと愉快に思った。

それは「……道徳教育といっても、目下とりあげようとする事項は、日常のしつけ・習慣に関することや、社会生活をする上で心得ておくべき事がらである……」というようなにあった。どの種類の学校でも、学校は単に学問の知識ばかりを与えるところでは

なく、その知識をつみ上げていくものになる人間をつくることもその使命の一つのはずである。たとえば音楽について考えると、きいて美しくいと感ずる感性を十もっていけば、十の得るところがあるし、五の人には五だけのことしかないわけである。その感じる力というものは、知識だけではどうするわけにもいかない。

年齢の大きい人たちを相手にしていると、入学とか、就職とかいろいろの競争がからまってくるので知的な方面のことが主になつてしまうのかもしれないけれど、そういう競争、とくに就職などは知識ばかりでなく、その人となりということが大きなポイントとなる。そういうことは急に身につけようと思つてもできるものではない。前に言つたように、日本の社会の中では、なかなか外国のように誰でもが導いてくれる、というわけにはいかなから、学校のように形をもつた中にいる間に指導にあたる人が考えてやり、そして新らしいことにあたつても自分で適当に判断できる常識は身につけてあげたいものである。

その点、幼稚園という世界は「生活指導」ということが大切で、ここでの主目標となるものであるから、ことさらに「道徳教育」とさわざたて固苦しく考えないで、当然のことのようにしていられる私たちにとっては気易いことである。

また幼稚園で希望していたように、ずっと一貫して教育をされるというわけになつたのでたいへん喜ばしいことと思うし、得意顔がしたくなるというものである。ただこれが理論だけに終らないことを切望している。